

資料

## 多世代間での双方向コミュニケーション促進ツールの開発 ——居住履歴を「見える化」するワークシート——

友淵 貴之\* 田代 優秋\*

\* 共同筆頭著者

和歌山大学 COC+推進室

要約：近年、地域活性化の拠点として地方大学が期待されている。地域での活躍が期待される大学生にあっては地域志向性の高まりから、何を仕事とするかと同時に、どこで暮らすかも重視している。しかし、仕事に対する価値観の整理は多くの学生にとって時間を要する。そこで、ライフヒストリーを記入することを通してどこで何を行い、どう暮らすかを多世代間で交流しながら学び、気づくためのコミュニケーション促進ツールとして「場所から考える自分史：リビングストーリー」を開発した。本ツールの有用性についてアンケート分析を通じて検証した結果、大学生と社会人とで交流を促す効果と、副次的効果として自己省察に寄与することが示唆された。

(キーワード：居住地, ライフストーリー, ワークシート, コミュニケーションツール, キャリアパス)

### Development of a Tool to Promote Communication in Multi-generational interaction ——Worksheet for the Visualization of the Resident History——

Takayuki TOMOBUCHI\* and Yushu TASHIRO\*

\*These two authors contributed equally to this work.

Office for center of community, Wakayama University

Abstract: In the recent years, local universities have been expected to play a central role in regional revitalization. With such demand, Increasing numbers of university students willing to work near their hometowns, place value not only on the content of the work but also on where to and how to live. However, realization of one's values regarding a career path is oftentimes time consuming. Accordingly, we have developed a tool to promote communication in multi-generational interaction programs. The tool is designed to help the participants identify their values through filling in "life story" on a worksheet. Results of questionnaire surveys showed that the use of this tool is effective for enhancing "communications among university students and workers" and for assisting "self-reflection".

(Key Words: Resident, Life story, Worksheet, Communication tool, Career path)

#### 1. はじめに

人口減少社会を迎え、大学と地域との関係性が大きく見直され、地方大学の新たな役割に期待が寄せられている。具体的には文部科学省「国立大学改革プラン」<sup>1)</sup>において、国立大学は地域活性化の中核的拠点としての役割を担うことが方針として掲げられた。こうした流れを受け、国立大学協

会「国立大学の将来ビジョンに関するアクションプラン」<sup>2)</sup>では「地域の多くの優れた若者を引き寄せ、地域で活躍する人材を育成すること」、「地方大学の振興及び若者雇用等に関する有識者会議」の中間報告<sup>3)</sup>では「地方大学に対して、地方公共団体、地域の産業界、金融機関などとの連携を深め、地域の将来ビジョンを共有しながら取組を行

っていくこと」, 内閣官房「まち・ひと・しごと創生基本方針」<sup>4)</sup>では「地域の人材への投資を通じた地域の生産性向上」等, 大学の新たな役割が次々と提案されている。このように地方大学には, 地域で活躍できる人材を引き寄せ, 育て, 地域に輩出していく「地(知)の拠点」としての存在意義が増々高まっている。

一方, 地域での活躍が期待される大学生等の若年層(以下, 若者)のキャリアパスに目を向けてみると, その地域志向性は近年変化の兆しを見せつつある。以前からあった大学進学時や初職時に地方から都会へという人口移動は減少し, 「地方への関心が高まりつつあり, 増加傾向」<sup>5)</sup>となっている。就職動向の主流は未だに大企業志向の「寄れば大樹の影」<sup>6)</sup>ではあるが, 近年は大学進学時に出身地外に出ても就職地に「地元(出身地)」を希望する学生が過半数を超える状態となっている<sup>7)</sup>。さらに, 第二新卒(新卒就職1~3年後の転職), 転職, 結婚などといったライフイベント時に, 地元へのUターン就職・起業も増加傾向にある<sup>8,9)</sup>。また, 暮らし方全般を巡っては, 仕事内容だけでなく「どこに住むか」「どう豊かに暮らすか」を志向した「ライフスタイル移住」概念も提唱されている<sup>10)</sup>。つまり, 地域での活躍を期待される若者が重視するものは, “何を”仕事にするかに加えて, “どこで”仕事をするか, “いつ”実行するか, という要素が顕在化してきたといえる。

こうした現状から大学ではキャリア教育の充実化が図られている。もっとも大きな転換点は, 2011年の大学設置基準の改正によるキャリア教育の原則義務化といえる<sup>11)</sup>。大学生自らがキャリアパスを決めるための支援として, キャリアセンター等の設置, キャリア教育科目の開設, 多様なキャリアを持つゲストを招いたセミナーや交流会の開催など様々な工夫がなされている。

しかし, 充実化が図られつつも課題点も多い。例えば, セミナーや授業などの「一対多」形式では半公開型となり機微情報に触れにくく(親密性), また短時間交流となり受動的になってしまう(双方向性)。また, ゲストの所属・肩書やその時点でのキャリアパスそのものが重要ではなく, 過去・

現在・未来の時間軸の中での変化や選択理由が重要である(パーソナリティ)。こうした時間軸に加え場所も関連させながら交流することは容易ではない(複雑性)。つまり, 単なる履歴書や業務経歴書には現れてこない「なぜ, そこで, その仕事をしている/してきたか」といった濃密な交流が促進されつつも, 短時間かつ簡便に行えるコミュニケーションツールが必要と考えられる。

そこで本研究では, いつ, どこで, 何をを行い, 何を感じてきたかを1つのワークシートで表現でき, さらにそのワークシートを用いて世代差を感じずに他者と交流できるコミュニケーション促進ツール「場所から考える自分史: リビングストーリー」(以下, ワークシート)を作製した。本報告ではワークシートを用いて, 1) 大学生と社会人との交流効果の検証, 2) 交流を通じた副次的効果の検証を実施し, 有用性を明らかにした。また, 効果検証調査時に指摘された3) ワークシートの改良点についても整理し, 改訂の資料とした。

## 2. ワークシート

### 2-1 着想の経緯と概要

本ワークシートには, 記入者がこれまで過ごしてきた場所, つまり居住履歴からキャリアパスを含めて人生を振り返るという特性を持たせている。こうしたライフヒストリーに関する既存研究として自分史がある。この自分史を振り返るためのツールの多くは, 1年ごとの主な出来事を現代史として記載することで, 記入者の記憶を誘発する仕掛けを取っている<sup>12,13)</sup>。しかし, キャリアパスを振り返るために1年ごとでは作業量が多く簡便性に欠ける。また, 自分史ツールはそもそも記録的な意味合いが強く, 他者との共有が想定されておらず, コミュニケーションツールとしては不向きである。

注目している居住履歴は, 進学, 就職, 転職, 結婚, 出産などのライフイベント時に転居として生じる傾向にある。また, 著者らの先行研究からも場所ごとに様々な記憶・思い出が付随していたことが明らかになっている<sup>14,15)</sup>。このように暮らしてきた場所をきっかけにすることでキャリアパ

表1 調査一覧

調査期間	調査名	調査方式	対象者属性	対象者数
2016/5/21～6/17	プレ調査	聞き書き方式	一般	11名
2016/11/16	プレ調査	自己記入方式	一般	19名
2017/2/16	効果検証①	自己記入方式	大学生、一般	67名
2017/3/16～3/21	プレ調査	聞き書き方式	一般	18名
2017/9/7	効果検証②	自己記入方式	一般	44名

スだけでなく、記憶、思い出、考え、価値観などの振り返りを容易にできると着想した。

さらに、居住履歴を使うことの利点としては次の3つが考えられる。1つめとして、暮らしてきた都道府県名あるいは市町村名の記述だけなので、誰でも書ける簡便さがあり、いつ、どこで、何を行い、何を感じてきたかを視覚化しやすい。2つめとして、居住履歴に序列がないことである。例えば学歴や職歴は交流者同士で比較すると意図せず優劣を感じる場合があるが、居住履歴に良し悪しはあまりない。また、序列がないため世代間交流に有り勝ちな年長者から年少者への説教臭さが生まれにくく、交流者間の平等性が担保される。3つめとして、職業や所属は複数になる場合があるが、居住履歴は居住実態のある場所を記述すれば原則一箇所となり単純である。初対面の交流者同士にはわかりやすさがあるだろう。したがって、居住履歴を用いることで、自分がいつ、どこで、何をして、何を感じてきたかを簡単に表現でき、他者とのコミュニケーションが促進されると考えた。

## 2-2 ワークシートの製作・改良過程

ワークシートの使用方法は、ワークシートを複数の対象者に一斉配布し、各自に居住履歴を記入してもらい「自己記入方式」と、大学生等がインタビューアーとなり対象者の居住履歴を聞きながら書き取る「聞き書き方式」を想定している。すなわち、前者はセミナーや交流会などで「一対多」「多対多」の交流、後者は聞き取り調査など「一対一」の交流での活用をねらっている。

製作・改良過程は、既存の自分史ツールなどを参考に試作版を製作し、3回のプレ調査で得られた意見に基づき前述2方式での使用を考慮して改良した。試作版は2016年5月に製作した。はじめ

めに1回目のプレ調査では、2016年5月21日～6月17日に多様な居住履歴を持つ和歌山県内在住者11名（地元進学者、地元就職者、Uターン者、Iターン者など）を対象に聞き書き方式で使用した。さらに、このうち4名を招いたキャリアセミナー（一般向け）を2016年11月16日に開催し、19名の参加者を得た。ここでは、自己記入方式で使用し、「これまでの居住地変遷、選択理由、その時々のおもひ出や価値観」、「なぜ和歌山に住むことになったか」を全体で共有するためのツールとして用いた。

次に3回目のプレ調査として、幅広い意見を収集するため和歌山県外での調査を前提に、かつ多様な転居が想定された東日本大震災の被災地（宮城県気仙沼市大沢地区）で2017年3月16～21日、18名に対して実施した。本地区は全世帯の76%が被災し、大多数が高台移転を選択した地区である。なお、このプレ調査は別目的の調査とも兼ねていたため、対象者は任意に設定している。

これら3回のプレ調査からは、記入の容易さ（所要時間など）、シートの視認性（線色・幅、マス目、シートの大きさなど）、記入後の交流方法（価値観など）について適宜意見を受け、ワークシートを改良した。なお、プレ調査を含め2つの効果検証の調査をまとめると表1のようになる。

## 2-3 ワークシートの仕様と書き方

ワークシートはA3サイズ二つ折りの両面からなる。実際のワークシートは本報告の附属資料として添付しているので参照されたい。表面には目的と使用方法を記載し、中面にダイアグラムがある。ダイアグラムは縦軸が居住地（市町村単位）、横軸が時間（年単位）、余白にはライフイベント、思い出、出来事、居住地選択の理由などを書き込



図 1 大学生と経営者の交流会

める。また、縦軸は上段下段に分けており、上段は出身都道府県内、下段は出身都道府県外の居住地を記述することで、UIJ ターン<sup>注1)</sup>を視覚的に見出すことができる。その時々々の価値観は、進学時、就職時など成長によって変化するため最上段に記入欄を設けた。

ダイアグラムへの具体的な記入手順は以下の通りである。

- ① 「実際の居住地名」を縦軸に記述し、そこでの居住年数に沿って横に黒線を引く。居住地間は転居が明確になるように縦につなぐ。
- ② 「理想だった居住地」を赤線で同様に引く。
- ③ 当時の思い出、出来事、居住地選択の理由、現実と理想がかい離した理由等を記述する。
- ④ 当時の気持ちや考えを思い出しながら、その時々々の価値観について記述する。
- ⑤ 全体を振り返り「今」の自分を形成してきた価値観を抽出し、価値観一覧と比較してみる。

なお、記入にあたっては公開可能な範囲で構わないこと（プライベートな情報、知られたくないことは未記入）を事前に説明している。

### 3. 効果検証の方法

#### 3-1 大学生と社会人との交流効果の検証

##### (1) 交流会

大学生（主に学部 1～3 年生を対象）と和歌山県内企業経営者との軽食を交えた「経営者×大学生大交流会」（共催：和歌山県経営者協会、和歌山大学 COC+推進室）を 2016 年 2 月 16 日に、大学構内食堂にて開催した（図 1）。参加者は企業経営者 22 名、学生 21 名、教職員 14 名、その他 10 名



図 2 地域連携セミナーでのワークショップ

（県職員等）の計 67 名があり、全体の時間は約 80 分であった。ここでの目的は、大学生が県内企業に関心を持ち、多様な就職先企業・起業の存在を認知すること、企業経営者が昨今の大学事情や大学生の考えや価値観を知ることにあつた。

##### (2) 交流方法

両者間に世代差が大きかったため、ワークシートを自己紹介ツールとして活用してもらった。まず、大学生と企業経営者をおおよそ同数のグループ（7～8 名）に分けるアイスブレイクののちに、各テーブルに着席してもらった。その後、各自ワークシートを 5 分程度で記入してもらい、各テーブル内で自己紹介を兼ねて居住履歴を説明しながら企業経営者からは特に「学生の時にやっていたらよかったこと」を振り返ってもらった。その後、大学生のみ席替えを 1 度行い、できるだけ多くの企業経営者と交流できるよう配慮した。

##### (3) 交流効果の検証

交流会後にアンケートを配布し、大学生と企業経営者の双方に a) お互いのことが知れたか、同様のイベントへの b) 今後の参加意欲について回答を得た。なお、このアンケート時にワークシートの副次的効果として「自己省察（自分の人生の振り返り）」への効果、およびワークシートの改善点（記入のしやすさ、使い方など）についても聞いた。改良点の提案方法については 3-3 で後述する。

#### 3-2 交流を通じた副次的効果の検証

##### (1) ワークショップ

全国各地の大学で地域連携に関わる教職員・コ

表2 企業経営者と大学生との交流効果

回答	回答者数			割合		
	企業 経営者	大学生	総計	企業 経営者	大学生	総計
知れた	6	5	11	33.3%	25.0%	28.9%
やや知れた	10	11	21	55.6%	55.0%	55.3%
どちらともいえない	2	4	6	11.1%	20.0%	15.8%
あまり知れなかった	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
知れなかった	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
総計	18	20	38	100.0%	100.0%	100.0%

ーディネーターを対象とした「第6回地域と大学を繋ぐコーディネーターのための研究実践セミナー」(主催:和歌山大学,共催:福岡大学)を2017年9月7日に、福岡大学にて開催した(図2)。参加者は地域連携業務に携わる教職員44名であった。このセミナーの目的はコーディネーターの人材育成や、大学と地域の発展に向けた輿論づくりなどにある。ワークシートを用いたワークショップはこのセミナーの中の1つのイベントとして開催し、目的は各コーディネーターが「これからとこれまで」を振り返る自己省察とした。全体の交流時間は約60分であった。

(2) 交流方法

参加者はセミナー全体の運営上、ランダムに7~8名のグループにあらかじめ分けられていた。途中の席替えは、交流時間が短かったため行わなかった。ワークシートの記入は自己記入方式(約10分程度)とし、記入しながらその時々「勤務先(転職していない場合は所属部局)」も付記してもらった。参加者間には世代に大きな違いがなかったこと、一般社会人のみの参加であったことから、簡単な自己紹介ののちに自由に相互質問を行ってもらった。

(3) 副次的効果の検証

ワークシートは生まれてから現在までの道りが視覚的に一望できる。このため記入作業を通じて過去の経歴を俯瞰でき、『今』の自分を形作ってきた源流、「その時々」の価値観や大小様々な選択」に気づくことができる。ワークシートにはこのように自己省察を促進する副次的効果があると想定した。そこで、ワークショップ後にアンケートを配布し、a)自己省察に役立ったか、その具体

的な内容について b)自由意見を聞いた。この結果の取りまとめでは、3-1(3)のアンケートの回答も合わせて行った。なお、このアンケートでもワークシートの改良点について聞いており、改良点の提案方法については3-3で後述する。

3-3 ワークシートの改良点の提案

上述の効果検証の調査アンケート(3-1,3-2)時に自由記述で改良点について聞いた。特に、セミナー時には「書きやすさ」についても評価してもらった。その結果、38件の指摘事項が得られた。これらの結果、指摘事項ごとに分類し、書式や使い方などの提案を行う。

4. 効果検証の結果

4-1 大学生と社会人との交流効果の検証

大学生と企業経営者との交流会においてワークシートの交流効果の検証を行った。アンケートの回答者は大学生が参加者21名中20名(回答率95.2%)、企業経営者が22名中18名(81.8%)、計41名中38名(92.7%)であった。

両者間で人柄や人物像などを知り合えたか聞いたところ、「知れた」「やや知れた」と回答した大学生は80.0%、企業経営者は88.9%と高かった(表2)。良かった点について大学生からは「これから学ぶべきこと等、やる気がさらに出た」「考え方が素敵な方がいらっしゃいました」「企業の方がとてもフレンドリーでした」といった意見が聞かれた。

4-2 交流を通じた副次的効果の検証

交流会とワークショップの参加者に対して、ワークシートを用いた交流による副次的効果「自己

表3 ワークシートによる副次的効果としての自己省察

回答	回答者数				割合			
	企業 経営者	大学生	ワークショップ 参加者	総計	企業 経営者	大学生	ワークショップ 参加者	総計
役立った	10	7	9	26	55.6%	35.0%	25.0%	35.1%
やや役立った	6	7	21	34	33.3%	35.0%	58.3%	45.9%
どちらともいえない	2	3		5	11.1%	15.0%		6.8%
あまり役立たなかった		3	4	7	0.0%	15.0%	11.1%	9.5%
役立たなかった	0	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
不明			1	1			2.8%	1.4%
無回答			1	1			2.8%	1.4%
総計	18	20	36	74	100%	100%	100%	100%

省察」について調べた (表 3)。その結果、ワークシートが自己省察に「役立った」「やや役立った」との回答者は交流会参加者 38 名中 30 名 (78.9%)、ワークショップ参加者 36 名中 30 名 (83.3%)、計 74 名中 60 名 (81.1%) であった。

自己省察に関する具体的な意見として 28 件が得られた。これらを分類すると、多い順に「価値観の変化や普遍性への気付き」が 13 件、「将来への展望」が 4 件、「他者との違い」が 3 件、「自己肯定」が 2 件、感想などの「その他」が 6 件あった。価値観については「それぞれの転機に自分がどんな価値観を尊重したいと思ったのが明白にできた」、「自分のキャリアと『重視している価値観』の変わり方が自覚できた」、「選択するときの価値観が変わりそうで変わっていない部分もあると振り返られた」など、普段振り返ることのない過去からの変遷に有用性を見出している意見が多かった。「将来への展望」としては「シート上だとあまり突出した変化がないなと自分のことながら少しさみしい気持ちになった。今後はもう少しチャレンジしていてもよいかと感じた」という自ら解決方法を見出している例もあった。

一方、少数ながら「あまり役立たなかった」「どちらともいえない」との回答者もみられ、その割合は大学生に多い。これは、そもそも 20 歳代で転居・移住はあまりしておらず、若年層には居住履歴を振り返ることでの自己省察には限界があると考えられる。また、あまり役立たなかった理由として大学生は「あまり活用できなかった。書き込む時間とシートについてのわかりやすい説明がほしい」、ワークショップ参加者は「自分のことを振

り返ることには役立ったが、移転と職の選択について自分はあまり関連がなかった。地域、地元に関心したいということに気づけたことはよかったかも」との回答であった。

#### 4-3 ワークシートの改良点とその提案

##### (1) 改良点に関する意見

ワークショップ参加者による書きやすさの評価について、「口頭での説明がなくても、記入例などがあったので書けた」との回答者は 36 名中 14 名 (38.9%) であったが、「口頭での説明がなければ書けなかった」と「口頭での説明があっても記入には手間取った」と書きにくさを感じた回答者はそれぞれ 13 名、7 名あり、併せて 55.6% であった。一方で「書き方はわかったが、なかなか思い出せなかった」との回答者はいなかった。ワークシートには記入例の掲載や書き方を参照できるようレイアウトの工夫を施していたが、その工夫の効果が薄く今後改良を要する。ただし、思い起こすこと自体ができないという回答者がなかったため、居住履歴を書くことは記憶の想起に役立ったといえるだろう。

自由記述からの意見としては「他者比較には優れている」「自己紹介がスムーズ」「面白かった(ゲーム感覚で)」「話のネタとしてはよかった」「普通の自己紹介では職歴のみで印象に残らないが、ワークシートがあるとお互いに共有しやすいので、より相手のことを知ることができた」といった良かった点への回答もあった。一方で、改良を望む意見も 38 件あった。これらを分類すると、意見の多かった順に「交流時間の短さ」が 14 件、「書き

方, フォーマットの改良」が 7 件, 「記憶, 価値観記入の詳細さ」が 5 件, 「地元内外の書き分け」が 4 件, 「記入時間の短さ」が 3 件, 「その他」が 5 件であった。

## (2) ワークシートの改良の提案

交流・記入時間の短さはイベント当日の進行・時間配分によるため容易に改善できる。今回の交流時間の短さは交流会参加者からのみ聞かれた。

これは交流会では席替えを行ったため 1 テーブルあたり交流時間が約 20 分, 一方ワークショップでは約 30 分程度あったためと考えられる。したがって, 時間の目安としては記入に 10~15 分, 交流に 30~40 分程度の確保, もしくは 1 テーブルの人数を 5~6 名に減らすとよいであろう。

次に, ワークシート自体のフォーマットについては, 「年数のマス目が分かりやすいと書きやすい」「長い線を引くのが大変, 目盛りが判りづらい」といった意見であり, 内容ではなくレイアウト等を工夫し, 視認性と直感性を高めることで解消するものである。

次に, 記憶や出来事をどの程度書くべきかという「詳細さ」について指摘があった。具体的には「思い出や出来事をどう伝えたらよいか, 価値観も重層的なのでちょっと書きにくかった」「思い出等が少し書きにくかった。どのように書けばよいかととまどった」との意見であった。これまでの記憶や出来事をすべて書き出すことはそもそも不可能である。そのため, 記入者が書き分けの判断ができる「記入基準」が必要であろう。ここではワークシートへの記入作業自体が重要ではなく, その後に他者と共有すること, あるいは思い出しながら自己省察することにある。したがって, 分かりやすい基準として, 居住地が変わった際にその理由や考えを書くといいたいだろう。そこで思い出せるもののみにして, その後のグループトークなどで補足, 追加すればよいだろう。

最後に, 若者の地域志向性の高まりを受けて「地元内外の書き分け」を設けたが, 馴染まない回答者があった。具体的には「他者比較には優れているが, 個人のみでの振り返りであれば, 出身地基準で分ける必要があるのか?」「県外/県内をわける

ところ」との意見があった。このワークシートでは多様なキャリアパスの“見える化”を狙っているため, UIJ ターンがダイアグラム上で視覚的に図形として見取ることを工夫点としている。したがって, こうした意図の説明や記入例に UIJ ターンのパターンを図示しておくことが有効と考えられた。

## 5. おわりに

地域での活躍を期待される大学生などの若者には, 近年地域志向性の高まりがみられる。こうした現状から, 仕事の内容だけでなく, どこで, 何を行い, どう暮らすかを多世代間で交流しながら学ぶ, あるいは気づくためのコミュニケーション促進ツール「場所から考える自分史: リビングストーリー」を開発した。この特徴は, 居住履歴を時系列に図化する単純かつ簡便な方法である。その交流促進効果は 80%以上の大学生や社会人が認め, お互いに知り合うことができていた。さらに, ワークシートへの記入と他者との共有によって, 副次的な効果として過去から現在までの自分を振り返ることにつながり, 価値観の変化や自己肯定など自己省察を促進する可能性についても示唆された。

## 謝辞

本報告の調査では和歌山大学 COC+推進室と地域活性化総合センターから協力を頂きました。本研究は, 科研費基盤研究 (B)「包括的地域再生に向けた順応的ガバナンスの社会的評価モデルの開発」(研究代表: 菊地直樹, 課題番号: 15H03425)の一部として行われました。

## 注

1) 本報告における UIJ ターンは, 出身都道府県を離れたのちに再び出身都道府県内の同じ市町村に戻ることを U ターン, 出身都道府県内の異なる市町村に戻ることを J ターン, 出身都道府県とは異なる土地への移住を I ターンとして取り扱っている。

参考文献

- 1) 文部科学省：国立大学改革プラン，文部科学省，2013，〈[http://www.mext.go.jp/compone nt/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afield file/2013/12/18/1341974\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/compone nt/a_menu/education/detail/_icsFiles/afield file/2013/12/18/1341974_01.pdf)〉，(2017 年 11 月 30 日)
- 2) 一般社団法人 国立大学協会：国立大学の将来ビジョンに関するアクションプラン，2017，〈<http://www.janu.jp/news/files/20150914 -wnew-actionplan1.pdf>〉，(2017 年 11 月 30 日)
- 3) 地方大学の振興及び若者雇用等に関する有識者会議：地方創生に資する大学改革に向けた中間報告，2017，〈[https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/meeting/daigaku\\_yuushikish akaigi/h29-05-22\\_daigaku\\_chuukanhoukok u.pdf](https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/meeting/daigaku_yuushikish akaigi/h29-05-22_daigaku_chuukanhoukok u.pdf)〉，(2017 年 11 月 30 日)
- 4) 閣議決定：まち・ひと・しごと創生基本方針 2017，2017，〈<https://www.kantei.go.jp/jp/s ingi/sousei/info/pdf/h29-06-09-kihonhousin2 017hontai.pdf>〉，(2017 年 11 月 30 日)
- 5) 独立行政法人 労働政策研究・研修機構：若者の地域移動－長期的動向とマッチングの変化－，JILPT 資料シリーズ No.162，2015
- 6) 朝日里美：大学生の企業選択－企業の社会的責任はどのように認識されているのか－，日本経営診断学会 8 (0)，128-133，2008
- 7) 株式会社マイナビ：2018 年卒 マイナビ大学生 U ターン・地元就職に関する調査，2017
- 8) 独立行政法人 労働政策・研修機構：UIJ ターンの促進・支援と地方の活性化－若年期の地域移動に関する調査結果－，JILPT 調査シリーズ No.152，2016
- 9) ITmedia ビジネス ONLiNE：若手の「U・I ターン」が増加，成功するには，2016，〈<http://www.itmedia.co.jp/business/articles/1611 /28/news046.html>〉，(2017 年 11 月 30 日)
- 10) 長友淳：ライフスタイル移住の概念と先行研究の動向－移住研究における理論的動向および日本人移民研究の文脈を通して－，国際学研究 4(1)，23-32，2015
- 11) 吉川正剛：「キャリア教育」時代の「就職支援」の再定義－就職支援部門の性格と大学設置基準第 42 条の 2 の意義，大手前大学 CEL L 教育論文集，57-66，2017
- 12) 幻冬舎：時代とともに振り返る自分史ノート，1-128，株式会社幻冬舎，東京，2016
- 13) 朝日新聞社メディアラボ：朝日新聞自分史ノート，1-192，朝日新聞出版，東京，2014
- 14) 槻橋修，友渕貴之，秋田遼介：浪江町請戸地区における場所の記憶の保存と活用に関する試論：被災地域におけるグリーンワークとしての 1/500 復元模型を用いた着彩-対話型ワークショップの提案，神戸大学大学院工学研究科・システム情報学研究科紀要 5，13-24，2013
- 15) 磯村和樹，槻橋修，友渕貴之：津波被災地域における復元模型を用いた地域空間情報保存手法に関する研究－岩手県陸前高田市での復元模型ワークショップで記録された「作り込み」に着目して－，日本建築学会技術報告集 22 巻 (2016) 55 号，1173-1176，2016